



# 針葉樹會報

通卷 第五十一號

## 第二回關西遠征記

十月三十一日、午後十時東京發

鈴木、丸茂

十一月一日、午前九時大阪着——十時半神戸へ向ふ——一時神戸

——二時「ふた、び山」——四時元町——五時上筒

井——六時南海高島屋——十時高瀬方へ泊る。

高瀬、鈴木、丸茂、十合、岡田、中島

二日、十時大阪——十二時京都——十二時半鞍馬——五時

大原——七時京都——十二時大阪

高瀬、鈴木、太田、丸茂

三日、午後十時半大阪發鈴木歸京

四日、午前七時大阪發丸茂歸京

ふたたび山から道屯堀へ

アンパン

「東北へ一週間程行つて来たばかりだし、まあ今度は残念だが

失敬する」さ何か御都合でもあるらしいトツサンを残して、遙々甲府から出て来た丸茂と合流し十月三十一日の夜行に乗る。

明くれば梅田、朝まだきに高瀬、中島に迎へられて一先づ高瀬方に落着く。その中にドンチヤンが見える。彼は「今日は一寸抜けられないから失禮する。明日と明後日は無理するから。」なんて恩に着せる様な事を言ふが、彼は月に三日や四日なら何時でも休めるんださうである。と云ふのは殆ど毎月無休ブツ通しの精勵振りのお蔭で休みが溜つて行く譯で、僕等とは一寸ばかり心掛が違ふ様だ。兎に角今日は神戸で待つてゐると言ふ話なので、勤めに戻るドンチヤンを見送つて四人は阪神で神戸の「そごう」にもぐり込むことになった。此處の四階で入江さん事十合は洋品を受持つてゐる。番頭氏振りが板に着いてゐると丸茂は感心する。「忙しさうだね」「いや、今日は大阪へ出張する事になつてゐるんだから大丈夫さ」と言つて、彼は暫くその邊を往きつ戻りつしてゐる中島を見てニヤ／＼して居たが、十合の「ホースケ、評判が良いぞ」にホースケは「え、何？」なごさ一寸さばけてゐたが「入江さんのお友達でスマートな方」は此の店では斷然有名なんださうである。十合を加へて食堂の一隅に陣取るさ間も無く岡田がやつて来る。大阪、神戸の連中は此の間から高瀬に折々お目出度の話を開かされて聊か參つてゐたらしいがそれでも性懲りもなく「落着いて仕事が出来ないだらう」なんて水を向ける。彼も亦彼で「さうでもないが、少しぼんやりしてゐる事は確かだね。手紙なんか書いても間違つて書き直してばかり居るよ」等と渡り合つて居る

間はよかつたが、其の中に油が乗つて来て「眼鏡をかけてゐる」事から、新婚旅行の場所撰定迄御相伴させられて何時しか晝過ぎになつてしまつたので、さて何處ぞ良き處もがなと鳩首協議の結果、夕方には大阪でドンチヤンも待つてゐると言ふので軽く歩く事にして店を出て、四タクを拾ふ。一臺に六人は餘り樂じやないが、さりさて二手に別れるのも寂しい。まあ針葉樹會の歸だと思へば良いと行儀よく納つて、神戸の街を横切りT O Rホテルの傍から新しいドライヴウエーにかゝる。此の登り口はなか／＼急で前の奴が落ちかゝつて来るのを背後から兩手で支へなければならぬのには一寸驚く。トンネルを一つくぐると、もう突かい棒の必要もなく、神戸港を右、左に眺めつゝ行く九十九折。紅葉で點々さ彩られた松の翠さ、それを縫ふ眞白な舗装道路との鮮かなコントラストに見入つてゐる間にふたゝび山の山門へ着く。此處で布引から登つて来る舊道に合してゐるが新道は近く六甲まで延長されるさうである。山門と言つても博覽會を思はせる様な此の邊の空氣とは一寸かけ離れたいやにパツトした朱塗の門でいさゝか面喰つたが、上の方は別に變つた所もなく、弘法大師を祠るさか言ふ御堂に神妙に頭を下げて降ることにする。神戸には毎日此處へ登る團體があるさうで、歩く事はなか／＼盛らしい。大菩薩邊りでよく遇ふ様なカーキ色の半ズボンにステッキと言つた連中が途中の茶屋にある大弓場の様な圍の中で輪投げをしてゐる。その傍では子供も混へた家族連が辨當を擲げて居る。かと思ふと今度は北や南で見る様な、背負子に荷を着け、ゴム足袋をはき太い棒を

突いた人夫が登つて来ると言ふ譯で、中央線の沿線を歩いてゐる様な氣がしたり、信州の山へ入つた様な氣分にもなつたりしてなか／＼良い所だなと感心する。赤毛布序でに布引の瀧へ寄つて見る。瀧壺に珍らしい鳥が居ると言ふ揭示に岡田は一寸境遇を失念したのか「一寸も見えないぢやないか」と言つて邊りを見まわしてゐたが、餘りきれいに掃除が出来て居て石つころ一つ見當らず、幸か不幸か遂に珍らしい鳥を見せて貰ふ事は出来なかつた。最後に高瀬の提唱で態々辨天様にお詣りをし、ふたたび山ハイキングも終つたので、元町へ出て「巴里の屋根の下」を聞きながらお茶をのむ。さてそろ／＼ドンチヤンも引けるだらうと言ふので打揃つて大阪へ向ふ途中、上筒井で岡田が家へ電話をかけたのは良いが何の話か一寸長かつたんで皆餘り有難くない様な顔をしてゐたが、改札口は彼の所持せる回数券のお蔭で一同フリーパスになつてしまつたんで文句の持つて行き處がなくおとなしく車に納まつた。

扨大阪の第一夜は、送別會に出る高瀬と別れてドンチヤンを新に加へ、道頓堀のさる處で夕飯を食つたんだが、ビールのお蔭で寸時惘然となり、我に歸つた時は皆もう外で待つてゐる。驚いて飛び出したが、もう少して迷子になる所だつた。折角冷えた顔も橋筋の人波と迷子の心配とに稍上氣の態で大童となつて一行に續く。やつと雑踏を乗り越えた處で一休みせんぞドンバルとか言ふ喫茶店に落着いた。此の邊は嘗てトッサンが滯阪時代の「ガルティエ・ラタン」であり、此の家も彼が折々の珈琲と思索の跡だと言

ふこさだ。紅茶など注文するうちに、ふさ耳にしたのは「メリーウキドウ・ワルツ」のメロディーである。ホースケが「ボエマ」を頼んだが、暫く考へて居たサーヴス嬢は、そんなのありませんと言ふ返事。神戸の「巴里の屋根の下」は一昔前。大阪は一寸新しく「メリーウキドウ」だが未だ半歳のギャツプがある。ドンチヤンよ、大阪で「ボエマ」を聞いたら知らせてくれませんか。

## 現代大原問答

うなぎ

十一月と云ふと東京の連中は關西が好きになるらしい、去年のケン、ペン、コンの三勇士の遺跡を吊ふつもりかどうかは知らないが鳩がアンパンくわへてやつて來た。折角來たのだから去年のコースも加へたら思ひ出も新に涙多き次第なりと第二日は八瀬大原。

大阪から出町まで四人で二圓五十錢に値切つた田タクを安くつて景色が好いなんて誠に以て氣の好い話だが、之が後で十二圓五十錢也を吐出す事になるさは夢にも知らず、天狗の名所鞍馬から大原へ、寂光院に昨夜仕入れの小原御幸を思ひ出す頃は暮色ソー然として黒い鳥が飛び出しそう。三千院への道ではもうまつくら。ケンチヤンが柿をほうばつたり喜樂センベをかぢつたりしたのを思ひ出したせい、アン盛にパンをほしがる、共食さはあさまじいが、さつき食べたのがジャムだから今度はクリームださばかり(さすがにアンパンが食ひ度いさは云はなかつた) 袋の中から一

つ取り出しては之はジャムだと、やつとクリームらしいと云ふ奴を大口あいてアングリやれば又ジャム。

さかく大原は食ひ物に縁がある。

眞暗な三千院の境内の腰掛けに四人がそのパンを處分しても歸りそうもない、わざ／＼此處まで來たのは大いなる目的があるんだ。東京のよからぬ輩に吹込まれて三千院前の徳女に何さかしたいさばるばる東京からやつて來たのだ、うす暗い電燈が燈つて居る四季の茶屋からその徳女が出て來た。今頃よからぬ人相(暗くてわからないつて?馬鹿云つちやイケナイ様子でわかるさ)の男四人、さては銀行ギヤングか女中殺しかと飛び出したものらしい。先手を打たれた様に四人(尤もその中二人は隨行者だ)未練殘して歸り掛けたがどうも足が進まないらしい、餘りのイヂラシサにかく申すウナギ臺所へ廻つて

「今晚は。遅くつてすみませんが一寸開けてほしいデス」

と聲を掛ければ長火鉢の前で煙管をくわへて居た徳女、やをら立上りて格子戸を開ける。

女史描く處の色紙、短冊、ゑはがき等そこに展げられる。

「今頃この暗いのによくお越し下さいました」

「イヤナニ、鞍馬から歩いて來たらこんな時間になつて」

「マア、鞍馬から、御健脚でいらつしやいますこと」

「イヤナニ、歩くのが仕事で」

「大分暗くなりましたが何時でせうか」

「六時一寸前です」

「こんな暮しをして居ると時計もいりません、先日から止りつばなしで」

「そうですね、時計はいりませんね、時計のない生活が羨ましいデス」

園山みたいなことを云ふ。

「ナニカ、皆さん俳句か歌でもおやりですか」

「イヤナニ、そんな事ちつとも知りません」

女史度し難き顔をする。

「此邊に泊る家ありませんか、お宅ぢや泊めて呉れませんか」

「家はせまいので何分に、今頃来て宿屋さんをきくお方は大低妙な方ばかりです、皆さんはそんな事ありませんが」

「本當に俳句をおやりぢやないんですか」

「サア、多分やらないんでシヨ」

若し出来るんだとでも云つたら泊めて呉れたかも知れない、そしてたら京都は三條で宿御斷を食はなくてもすんだのだが。と云つた様なわけで徳女ものする處のゑはがきを買ひ込んで思ひを達した二人であつたがその代價十二圓五十錢也。

ゑはがきを一度にこんなに買つたのは初めてだ。定めし徳女もその夜は晩酌の杯を餘分に重ねた事であらう。

(編輯者註、此の一文は結婚前夜非常な多忙中にも不拘態々書いて頂きたるもので筆者に厚く御禮申上ます)

## 秋 山 拾 遺 (KANP)

### 一、大樺小舎と北岳バットレス

白峰北岳の東北方、小太郎尾根からの斜面が緩く傾斜するあたり、地圖によれば二三〇七Mの地點に白根御池、一名大樺池がある。その邊りにある南特有のログキャビンこそは懐しい御池小舎、即ち私達の仲間と呼んで居る大樺小舎なのである。小舎の彼方には北岳の絶巔及びその東面即ちバットレスのスカイラインが望まれ、「マツチ箱」の岩稜が顯著に見られる。前面には大樺澤が深くきれ込み、それを辿る眼を壓してアカメケ澤の頭より高嶺あたりの鳳凰山塊が屏風の如く聳立つてゐる。

此の小舎に於けるヒュッテ・レーベン程氣持良かつたそれを、私は餘り經驗しない。確かに都會から本當に絶縁された深山の雰圍氣をしみじき味ひ得たのである。殊にバットレスの岩場に思ひをいたす者にとつては尙更であらう。

小舎からバットレスへは踏跡がある。バットレスに就いては既に相當述べられて居るから繰返す必要はない。ルートは(1)より(7)まで、番號によつて呼ばれてゐる。此度の行では、村尾氏、小林、私で(4)即ち「マツチ箱」の岩稜を攀つた。(4)及び(3)は就中最も困難とされてゐるものだけに相當に登りこたへがあつた。尙(3)は去る六月、小谷部、鷹野、森川の三君が登つてゐる。(4)は最も長いリッツである爲(3)よりは時間

がかゝるであらう。私達の所要時間は八時間であるがこれは少しかゝり過ぎてゐる。(5)のルンセも此度小谷部と二人で登つたのだが、ルンセ附近のフェイスやリツヂ等はホルドも相當あり岩がサウンドな爲に(尤もバツトレスは全體として非常にサウンドな岩場であるが)不安なき愉快なクライムを味える處である。(6)、(7)となるさますゝ容易さをますが(1)、(2)は如何であらう。(1)は餘り面白くないにしても(2)のガリーは登つてみる價值があらう。ガリーの爲落石を注意する必要があるが、最もその多い秋ですら殆んどなかつた状態であるから、餘り心配はいらないと思ふ。此の次行つた時は是非登つてみたい。

北岳バツトレスは奥穂やジャンダルムの岩場で、バスのブーブー云ふ音に矛盾を感じる方々にはもつてこいの岩場である。這入るに少しの苦しみを忍べば、大樺小舎におくる岩登生活はさながら昔日の涸澤岩小舎に於けるその如きものとなるであらう。

#### 一、五葉尾根に至る路について

野呂川の廣河原より五葉尾根にいたる路について今更らしく書く程の事もないが、此度の歸路に於て、村尾氏、小林の一行、又他の一行も路を失つて結局五葉尾根に至れなかつたから、此の次行く方達に何等かの手だてにでもなればと覺書をしてをく。

順序として廣河原より下流で野呂川の左岸即ち鳳凰山塊側より入つてゐる澤の名を上流より順に記す。高嶺の三角點より西南へ流れるのが東ゴロ澤、その一つ下流の澤はアカメケ澤(故に高

嶺の東方にある地圖に無名の一峰はアカメケ澤の頭と稱するは御承知の通り)、觀音岳と藥師岳の鞍部よりおちてアカメケ澤と落口を接近せしめてゐるものが嘉助澤、その下流に地圖に水線の入つてゐる澤がゴトゴト澤、辻山の西より發するものが赤澤、と大體五本の大きな澤(以上は勿論地圖に名なし)が入り、最後に深澤が入つて居る。尙ほ五葉尾根小舎は深澤の源頭にある。

この路が比較的解りにくい譯は、之等の澤の落口が割合に悪い——即ちガラ場(此の地方の方言でオキと云ふ)であり、或る處は斷崖等をなしてゐる爲、路が一定せず季節により異なること、つまり高廻りをする時もあれば、河水の少い時は徒渉によつてオキをさけて行く事もある。それで迷ひやすい踏跡が多くなつた結果に外ならぬと思考する。要するに地圖には嘉助澤の少し下流で小路の記號は終つて居るので、こゝから廣河原の間が問題となる。この小路の終つてゐるあたり(河原に近く)には左岸の木の枝に「これより五葉尾根道」と書かれた白ペンキぬりの小札がぶらさがつてゐる。だから野呂川の河水に出来るだけ忠實に下つてゆけばよいと云ふ事になり、高廻りはなるべく避けた方が間違ふ憂ひは少い。

私達の通つたのが一番近くて本當の道であるとは斷言出来ないにしてもますゝ餘り違つてはゐないと思ふ。故に通過したのをそのまゝにかゝげる。廣河原の小舎から白鳳峠の方へ行く道に従つて川を少し溯り丸木橋で左岸に渡つてもいいが、私達は小舎から右岸を一寸下り大樺澤の落口の手前ですぐ左岸へ徒渉した。そ

して左岸の踏跡（處々にケルンあり）にそつて下り、東ゴロ澤の落口のオ・キをこし、棧道等によりへつる處もあつて、少し行くに此度は相當大きなオ・キにぶつかる。此處でそれをさけて右岸に渡る。此處には丸木のかげ橋あり。これなくとも徒渉は可能。しばらく右岸の河原の磊岩の間を縫つて進み、アカメケ澤の落口をすぎた頃再び左岸へ徒渉。この附近は河水が二分して真中に叢木の生えた地があるので直ぐわかると思ふ。これより上流では小さな釜等あり、徒渉は不可能であらう。渡つて左岸をゆくときすぐ嘉助澤の落口あり。この附近の踏跡も割合明瞭である。一寸したへつりを経て暫く進むと前記の白ペンキの札の處に出る。

それより道は河原を離れて漸次高くまぐ道となり、五葉尾根の小舎へさうねく長つたらしく續いてゆく。秋は落葉で幾分不明瞭だが、ここからは間違へる事は殆どないであらう。野呂川の増水せる時、季節では五、六月頃には徒渉はおそらく不可能であらうから高廻りをせねばなるまい。（一九三五・十一月）

## 新婚を覗きそこなう記

（園）

十一月十五日の佳日を卜して芽出度結婚式を挙げ遠く南海に楽しい密月の旅から歸つた高瀬君の新家庭を横濱本牧に探訪する。三溪園行きの櫻並木道を十歩も歩くとき、夜目にも明かに墨色も新しい標札が目につく。往來に面した新築のこぢんまりした家であつた。玄關に立つて案内を請うと主人が氣輕に出て來た。あれ

はまだフラウの教育が足りないのか、きまりが悪いのか知らないが本來は女中かフラウが出て來るのが本當だらうと思ふ。主人は主人らしく大あぐらで納つて居なくちやなるまいがで通されたのが八疊の客間、遠慮なく正座に坐ると義理にでもいゝ家だねと褒めざるを得ない程よい家である。主人は新婚できまりが悪いせいか挨拶しない先から家賃の高い事をこぼすのだが結局幾らで借りてゐるのかは言はないから判らない。改まつて祝辭を述べると流石に照れて「イヤどうも」と言つて後を濁す。二人共に言葉の繼穗が出ないから仕方なく沈黙する。先程から襖の蔭で衣ずれの音がしてゐるのだが、待望のフラウはそう簡単に玉顔を見せては呉れない。だから主人も僕もギョチなく畏つて坐つてゐるのみである。やがて遂にスル／＼と襖が開いてお辭儀をしてゐる黒い頭が表はれた。サツと主人の顔が紅潮するよと見ると、フラウが頭を舉げて何さか言つた。慥かに何か言はれたに違ひないのだが、ごつちの故障か意味は通じなかつたけれど、僕も慌て、敬禮をした。高瀬は、ここさらに錆のある音でユツクリと「これが茂子、小川のと同じ名前です。こちらが園山さん」と斯く丁寧に紹介する。忝しくいゝ一度お辭儀をして、これでやつと拜顔の光榮に浴するまでの儀式を終了したのであつた。粗茶と粗菓が出されて又主人と二人きりになつたら急に元氣が出て來たので無禮さは知りながらも、「フラウさんを何さお呼びかけしたらいいか」と聞いた所が、時既に彼も度胸が付いたと見えて言下に「そりや奥さんサ。僕はいつだつて奥さんと呼ぶんだ」と厚釜しいにも程があ

る。奥さんは次の部屋で忍び笑をしていらつしやる。

「そろ／＼お宜敷でせうか」　と鈴を振る様なさといふと古風だから訂正して、ハーブのG音の様な美しい聲と共に酒肴が取り運ばれた。新婚の家庭へ酒のお馳走になり来たのではないのだが、主人の好みとあれば敢て辭すまい、寒暖計を使つて燗をしたこの事だけあつて體温よりも一寸高く、飲むにはよいが置くに直ぐさめる。お料理は何れもお手製ださうだが刺身があの位うまく切れ、ば大したお手並だ。皆さん御承知の通り、あれは嫌ひ、これは好かないと食事の八釜しかつた筈の高瀬君が、實に意外も意外五皿六皿のお料理を綺麗サツパリ平げて好も嫌もない。「奥さん、今日はさてもうまいよ」と旦那様が仰言ると、奥さんが口に袂を當て、「アーラにもやもにや」と仰言る。傍にある僕は飯が咽喉を通らんです。御飯が濟むとお菓子が出る。あれは客には食べさせずに御主人が召上る物とみえる。僕がそろ／＼氣兼ねて何時だらうと聞いて見たらもう筈が何本も立つてゐる時間ださのお言葉なので小心者の僕は手も出さず引下らざるを得なくなつた。幸川君に探訪記を書けと依頼されてあるのだが、高瀬君の新家庭を探訪するには面の皮の一時もある人でないさやラレテしまひますよ。

## 九郎ちゃんへ

(狸)

突然會社へ電話がかゝつて君の懐しい聲を聞いた。

それから數日の間に僕等の仲間で白馬岳へ行く約束が出来た。君

も行くさ云ふ。何んて嬉しいんだらう。

さ云つて君は大阪へ歸つた。あの懐しい松本驛で君が向の方からスキーを持つてやつてくる。僕等は胸をわく／＼させて「来た／＼」と云つて君の處へ飛んで行く、それから二日間!!

こんな楽しい夢は又さあらうか。そして此の夢が二週間ばかりの後に實現されるのだ。べんちやんだつて、熊さんたつて、謙ちやんだつて、僕だつて、待ちに待つた。

そして其の日が愈々近ずいた時「君は行けぬ」と云ふ噂が東京の方へ傳はつて來た。其時此の噂は不思議にはんこの様に思へて落膽した。「第一」には長身の君が君獨特の歩き方をして、驛の向ふの方からやつて來るのを迎へ様と云ふすばらしい夢が破れたからだ。「第二」にはそれから二日間の君との山でのおつき合ひ(是れはべんちやんに云はすれば一寸の油断は會報紙上に千歳迄も種を残すし且つ又所有物品の嚴重なる監督等で大變なる二日間ではあるが)が出来ないからだ。

愈其日が來た。然し君は見えなかつた。松本の朝、信濃電鐵のプラットフォームで其の夢を思ひ出したらさても淋しかつた。「なぜ來ないか、九郎ちゃん」

來れない事情は聞かなくても大體は分るよ。僕にだつて他人には云へない色々の事情が山行を阻む、然しそれを乗り越へずには居られない。

まだお互に若い。若い内に好きな山へ行つて置かないと腰がまがつてしまつてから後悔するぞ。

今度約束した時には決つて出て来い。

少々位は妻子眷屬親戚故舊に不義理してもかまわない。

「どうも仕事の方が忙がしくて!!」なんて云つて居るのはつまりない言譯だよ、孫さんを見る。

晩の九時迄重役のお伴をして星ヶ岡料店で酒を飲まされても一時の夜行にはちやんと間に合はせる。而も中野の自宅に一度歸つて一風呂浴びて来るさ云ふ(是れは孫さんにしか出来ないかも知れない)。此點は筆の勢で書いてしまつたが僕の作り事であるかも知れん。

九郎ちやんよ、來年三月には誘ふから一緒に行かないか。三月の下旬頃三四日間會社の方を都合して置いてくれ、素晴らしい處へ誘ふから。

君と行き度い／＼と書き立てるさ「何か腹に一物あるな。持つてくるものは氣をつけろ」なんて云ふ不心得者もあるが、もう山の道具も「コーリ」二個に一杯になつてしまつたから是れ以上ふやさぬつもり、御安心を請ふ、もう近頃は／＼減らす工夫をして居る。過日も猿倉小屋にメリヤス(特製)一枚寄附して來たさ云つても誰も感心してくれる者はないが!!

さ云ふわけだ。再び云ふ、九郎ちやんよ、今度こそは一緒に山に行こう。

### ◇山岳部より會員諸氏へ御願ひ◇

例によつて經濟的に惠まれざる部の事ですから、次の様な厚か

ましい御願ひをいたす事になりましたが、何卒御配慮下さい。それは各會員諸氏の御手元へ、「針葉樹」を二冊宛御送附いたします。その意味は一冊は會員諸氏御自身へ贈呈する分で、もう一冊の方は御引受けを御願ひする分です。ですから一冊分の代金(定價は一圓六十錢ですが、山岳部關係は一圓五十錢です)を御送附下さいます様に。御願ひとは以上の、ことです。若し一冊と云はず數冊或はそれ以上御引受け下さいますれば甚だ幸ひで御座居ます。尙、諸氏に御引受けを御願ひいたします金額は當方にて右から左へ的に印刷屋の方の支拂となります故、御手数でも本が届き次第直ちに御送金下さいます様重ねて御願ひ申します。(送金先)東京市杉並區馬橋二ノ二三八 望月達夫

## 山岳部報告

日誌

○國立懇親會 十月五日(土)於國立部室

出席者(會員) 中川、松木、村尾、近藤、増山

(部員) 齋藤、林、森脇、小林、小谷部、望月、鷹野

森川

例の如く月のかくれた空にお月見をして、ひたすらに飲み且食ふ。それから二階の御座敷に壽司詰めとなつて寝る。

○高尾登山 十月六日(日)

羅、高原、大塚、毛塚、内田、秦、齋藤(明)、日江井。

月(森脇は后に参加)は、未明に起床して、文子通り朝飯前に高尾山に至り、小佛を経て晝には舞ひ下る。有志のみ再び部室により、吉澤一郎氏、柿原等と共に學内散策の後解散。此度の懇親會は中々有意義であつた。

○定期部員集會 十月十九日(土) 於國立部室

出席部員(本科、六名。豫科、十一名。)

下旬よりの北岳大樺小舎生活についての具體的相談をなす。

此の行は全部員参加と云ふ計劃なり。

○定期總會 十一月十一日(月)午後三時より、於國立部室

出席部員(本科、八名。豫科、九名。専門部、四名。)

一、秋山報告を一通りなして、森川の地藏佛に於けるアリシデン  
ト及び其の後の経過を、林報告す。

二、冬期の登山計劃及び乗鞍スキー合宿等の事につき小谷部より  
説明あり。

三、昭和十一年度委員を決定す。左の如し。

代表、小谷部全助。

庶務、佐々木誠(本) 岩崎利一(豫) 新羅二郎(專)

記録、望月達夫、高原龍雄。

會計、森川眞三郎、原 鐵三郎。

圖書、森脇芳光。

器具、小林重吉。

○定期部員集會 十一月廿五日(月) 於國立部室。

出席部員(本科、四名。豫科、四名。専門部、三名。)

廿三、四日の連休を利用し先輩方と白馬へ行つた小谷部等の話を聞き行けなかつた者共俄然雪山への憧憬にかられる。久し振りに眞暗になる迄ストーブを圍んで語る。

## 記 録

神津牧場(五日—六日) 大野。

三ツ峠岩登練習(十六日—十七日) 柿原、小林、森脇、和田、  
他一名。

穂高行(前穂北尾根、ジャンダルムの飛驒尾根) (十六日—廿

二日) 小谷部

甲武信附近(十七日—十八日) 林、柿原。

伊豆ヶ嶽(二十日) 齋藤(明)

大菩薩附近(二十日) 岩崎、原。

雲取山より將監峠(二十日—二十二日) 大塚

裏高尾(二十二日) 内田。

大樺小舎生活(パーティを分けて北岳バレットレス(4)(5)(6)(7)を  
登攀す) (二十六日—十一月三日) 村尾氏、小谷部、望月、

小林、和田、佐々木、西野、岩崎、森田、奥原(人夫)。

鳳凰山(此の行は大樺小舎に居る先發隊と合流す可く出發したが、  
地藏佛に於ける森川のアクションにより下山を餘儀なくせられた。)(二十九日—十一月四日) 林、柿原、森川、新

前夜國立に籠城した、先輩五名、及び林、小林、小谷部、望白馬岳(十二月廿三日—廿四日)——松木、村尾、吉澤、近藤、増

山(以上先輩)小谷部、鷹野、岩崎、原、松浦。

荒船山附近(廿三日—廿四日)榎本。

大菩薩、小金澤山(廿四日)大塚。

針葉樹會例會 十一月十一日 於如水會館矢野會議室。

出席者(會員) 中川、松木、吉澤、近藤、高橋、園山、小川、

鈴木、増山、吉澤(松)、芋川。

(部員) 齋藤、小柳、林、柿原、小谷部、望月、小林、

森脇、佐々木、和田、岩崎、新羅、松浦、齋藤

(明)、日江井、内田。

過日の森川君のアクセシデントに關して林、柿原の兩君より説明あり。會員を代表して中川増山兩先輩の訓示あり。

#### 會員消息

關守三郎君 獨乙伯林へ轉任。

c/o Japanische Botschaft, Berlin W. 62, Ahornstr. 1.

Deutschland.

曾田莊太郎君

本所區千歲町一ノ一〇へ轉居。

奥野綱重君

帶廣市東二條九丁目九番地へ轉居。

勝田一郎君

十一月三日乃木神社に於て池上千代子嬢と華燭の典を舉

げられ續いて赤坂幸樂にて盛大なる披露の宴を張らる。  
高瀬進三君

十一月十五日帝國ホテルに於て石川茂子嬢と華燭の典を  
舉げられ引續き同所にて披露。終つて直に伊勢より南紀  
州への密月旅行に立たれたり。何れ針葉樹會席上にて旅  
行談ある由。尙同君は左記へ新家庭を營み針葉樹會員の  
來訪大歡迎の由。

横濱市中區本牧町三之谷七〇

#### 編輯後記

どうも毎度の事ながら、發行がおくれて申譯ありません。會社  
の方の仕事が忙しくてナンテ言つた所で、誰も信用して呉れる  
ぢやなし。それに、そんな事でも言つたらコンチャンにしか  
れる。

扱、針葉樹會報の内容が近頃では段々ともつともらしくなつて  
しまつて昔日の俤なきはちと残念です。往年の猛者連よ!羞澁  
まないで出て來い。吉本のエンタツ、アチャコと肩を並べるべ  
し、コンのコンビよ。貴兄等の出演を待つ會員は僕一人ぢやない。  
近頃例會へ顔を出さない連中が可成り居るので時々問題になる  
様ですが其程心配した事もないでせう。人に依つては時々例會  
へ出る事が非常に良い薬にもなりますが、始終例會出席中の様  
な氣持である者には、月に一度の針葉樹會當夜位は早く家へ歸  
つて眞面目な幾時間かを味はしてやるのも良いと思ひますが。